

OR を築いた人々(13)

無私の人—小田部 齊 氏

福川 忠昭, 若山 邦紘, 柳井 浩

1957年発足当時から1970年ごろまでの日本オペレーションズ・リサーチ学会は、その事務所も、「日科技連」や、新宿「紀伊国屋」の一室、青山・全菓連ビルの中にあつた「構造計画研究所」の片隅、曙橋の「フジ学院」の一室などを転々としていました。現在の「学会事務センター」に落ち着いたのは1971年。それまでには、立ち退きを求められても、引越費用の準備もなく、会員から、そのための寄付を集めたこともありました。しかし、スペースの貴重な東京で、少しの間でも置いていただいたことを感謝しなければなりません。

当時の日本産業界はOR, IE, QCと、新しい管理技術の導入に積極的でありました。中でも、石油産業においては、線形計画法がめざましい成果を上げており、オペレーションズ・リサーチに大いに力をいれていました。また、その他の産業のオペレーションズ・リサーチ学会に対する期待も大きく、理事会においても当時の産業界を代表するような錚々たる方々のお顔を拝見することができました。

当然のことながら、学会の活動についての要求も小さいものではありませんでした。しかし、そのころのOR学会は、規模も極めて小さく、事務機構といっても、1988年まで事務局長をしておられた鈴木規子さんともう一人の女性だけで、大きな事務組織を従えている方々にとってはまことに歯がゆいものだったと思います。実行上の詳細の決定はほとんど「庶務幹事会」に委ねられていました。会則は大雑把なものでありました。法人化等は夢でありました。何事につけてもやり方が決まっておらず、すべてを手探りで決めていかなければなりません。官僚化して責任逃れをしようにも、まだそのゆとりがありません。

庶務幹事会は、現在と同様ですが、大学関係、産業界、および陸上自衛隊等からの幹事で構成されてきました。中でも、東燃(=東亜燃料株式会社)から幹事として来てくださっていたのが小田部齊氏です。同氏は当時、東燃の中でも「数理計画課長」というオペ

レーションズ・リサーチ推進の実行部隊長であり、業務の中でORを活用される傍ら、この分野の発展と、後進の育成のため、当学会にもご尽力いただいたわけです。

初期のころの「庶務幹事会」の決定は、それぞれその場当たりのもので、

それぞれの幹事のもつ、各自の職場での経験と知恵を集めたものでした。しかも、連絡系統もその方法も曖昧で、いろいろな齟齬もあり、侃々諤々の議論も少なくありませんでした。こんな中で、小田部氏は、その温厚篤実、謙虚なお人柄と円満な常識で、つねに幹事会を前向きに推し進めてくださったのです。ここにまた、同氏が幹事として連れてきてくださった、東燃では部下に当たる川野幸三郎氏の巧まざるヒューモアが大いに功を奏したのです(本来この稿も川野氏の手になるべきものと思いますが、残念ながら、1991年ご他界になっておられます)。

諸規定、マニュアルなども1970年ごろから、ようやく作成に手がつけられ始めました。また、学会の一層の発展のため、法人化と、「OR事典」の発行が計画されました。それぞれに手間のかかる緻密な作業が必要でありましたが、特に学会の法人化には、組織、規則等を監督官庁と相談しながら、詳細に明記しなければなりません。この煩雑な作業を一手に引き受けられたのが小田部氏です。氏は、困難な仕事を少しも避けることなく、着実にことを進められ、1972年には学会の法人化が達成されたのです。

しかし、学会をしっかりしたものにしていくためには、まず第一に、学会がしかるべき数の会員を擁していなければなりません。小田部氏は、会員増強委員長を務められ、これに大きな力を発揮されました。1960



年代の終わりごろには、まだ700名程度であった会員数が、同氏のご努力のおかげもあって、1975年を過ぎると2,000名を超えるようになったのです。

また、広告委員長として学会誌の余白に載せる広告を集め、それだけでなくも乏しい学会の財政を潤してくださいました。これは、時間と労力と忍耐の要る、報われない仕事です。小田部氏は、長年にわたってこの仕事を引き受けてくださいました。

これと同時に、学会そのものの公的地位の向上を計らなければなりません。日本オペレーションズ・リサーチ学会は日本経営工学会、日本品質管理学会と組んでFMESの名で呼ばれる協議会を結成、これを通じた運動が功を奏し、日本学術会議に経営工学研究連絡委員会が設置されました。このときのFMESの本学会推薦の代議員こそが小田部氏でありました。こうして、当学会員による文部省科学研究費の申請が容易になったのです。また、OR学会から推薦された近藤次郎教授が、研究連絡委員会において学術会議の会員に選出され、さらには連続三期にわたって日本学術会議

議長に選出されることになるその道も、ここに拓かれたのです。

小田部氏はその後も、理事として、また副会長として学会の運営・発展に尽力されましたが、そのお仕事は、枚挙のいとまがありません。それも皆、人目に立たない地味な裏方を進んで引き受けられたのです。中でも、森口繁一教授が発起・指導された研究会「第三世界とマイコン」においては、幹事を務められ、詳細な記録を残し、研究会は多くの成果を上げることに成功しました。

氏は、東燃退社後も、一時は横山勝義会長のご指示のもと、学会の事務局を強力に指導され、さらには、文京女子大学の教授として後輩の育成に当たられるなどオペレーションズ・リサーチの発展に、陰から、しかし、力強く尽くしてこられました。残念ながら、1997年病没され、また、その功績を知る人々も少なくなりましたが、わが国のオペレーションズ・リサーチの今日は、このような方のご尽力なしには語れません。